あざみ

池田桂一

木の葉を散らす風が窓を叩き
そしてゆれ動く黒ずんだ梢が
私の心を　夜の悲しさに誘う
何と不思議な巡りあわせだろう
夕映えの消えてゆく空に向って
私の心は　またくりかえす
何と不思議な巡りあわせだろう
うるんでみえる星のまたたきが
心の中にあの人の口にした
花の名前を思い出させる

黒いテーブルの上に　水で
書かれた　あの人の
名前も　うすれて
タバコの煙りが
思い出をくゆらせている

私の手許から
赤い照明の中に
あざみの花の色に似た渦を巻く煙りが
静かに　私の手の届かない
天井の暗がりに消えていく
×××××××××
意識した時間の流れと
夜の心にしみてくるような
低いベースの響きは　いつまでも
思い出を　私に縛りつけて放さない